2010年8月31日発行（創刊2002年3月31日）

仙台文学館ニュース

第十九号

Sendai Literature Museum News

仙台市内のアーケード街にて

文学のある風景

ドラづくし

子どもが何かに、ものすごく興味を持つ時期を「敏感期」というのだそうだ。息子はいま、文字の敏感期というものらしく、あいうえお表を新聞のように毎日眺めて、遊んでいる。ひらがなが読めるようになったのが嬉しくて、散歩の途中に自動車が通ると「め！」だの「つ！」だの、ナンバープレートを指さして叫んでいる。

（中略）

そのうちカタカナにも興味を持ちだしたが、まず読めるようになったのは「ドラ」だった。「ド」と「ラ」ではなく、あくまで「ドラ」でワンセット。もちろん「ドラえもん」の「ドラ」である。

私が新聞を読んでいると、「ドラ！　ドラ！」と言って、目を輝かせて近づいてくる。何かと思って見ると、テレビ欄に「ドラマ」の紹介が載っていた。その見出しを指してにこにこしている。

タクシーに乗って「ドラ！　ドラ！」と言うので目をやれば、そこには「ドライバー」や「ドライブ」の文字。

缶ビールを飲もうとすると、また「ドラ！　ドラ！」。今度は「ドラフト生」だった。

アーケード街での「ドラ！　ドラ！」は、「ドラッグストア」だし、もう少し歩くと「ドライクリーニング」も登場した。

こうしてみると、身のまわりにドラのつくカタカナ語って、意外と多いものだなあと思う。他にもドライヤーとか、ドラゴンとか、ドラキュラとか、自分でもいくつか考えてみると、これが結構ある。

先日、散歩の途中で、「ドラ！　ドラ！」がまた始まったので、指さすほうを見ると、大きな看板が立っていた。これは、さすがに私も思いつかなかったもので、「ラドン温泉」の看板だった。ちょっと左右が、逆になってはいるけれど。

（俵万智「ドラづくし」）

『ちいさな言葉』
「ドラづくし」所収
（2010年　岩波書店）

小池　光の

気になる日本語 8

「ため」

「ため」という日本語がいろいろなところに出没している。

子供が塾に通って勉強に精出すのはいい学校に入る「ため」である。いい学校に入るのはいい大学に進学する「ため」である。いい大学に進学するのは、いい会社に就職する「ため」である。いい会社に就職するのは何の「ため」だろう。安定した生活の「ため」か。安定した生活を得るのは何の「ため」か。「しあわせ」の「ため」とでもいうべきか。

「ため」を追求してゆくと、このようにだんだん先が抽象的になり、ぼけてくる。「しあわせ」などというのは、その最たるものであろう。はっきりしているのは「ため」を掲げて行動してゆく限り、その目的はその行為自身の中にはなく、外部にあるということだ。

なにかの「ため」になるからとかでなく、知らないことを知るのはおもしろいことだから、できなかったことができるようになるのは快感だから学校に行く、勉強する、というようになるとずいぶん教育現場の風景も変わってくるような気がする。しかし、わたしたちの思考パターンはなかなかそうはならない。限りなく「ため」に呪縛されている。

かつて「お国のため」というスローガンが一世を風靡し、ひとびとはあらゆる犠牲を耐え忍び、ひとつしかないいのちさえ差し出した。戦後「お国」という価値の対象が消滅し、その「お国」がいた場所にさまざまな個人主義的価値がとって代わった。様相は一変したわけだが、でも「○○のため」という思考パターンには何の変わりないともいえる。

目的を持つことで心身がしゃんとして健康健全に日々がすごせるなら、それはそれで何も悪いことはない。だが、それが過剰になってしまうと、現在が見失われ、このかけがえのない一瞬一瞬が、何かに従属しはじめる。これは一種の倒錯であり、見方によっては滑稽である。健康の「ため」、毎日毎日ワーキング、ジョギングを欠かさない人を見ると、なにか違うのではないかと考えてもしまうのだ。もちろん健康がすばらしく大切であるのはいうまでもないが。

たぶん日本人のメンタリティの奥底にはこの「ため」の一語がでんと座っている。お国のため、家族のため、愛する人のため、に働く。自分の将来のため健康のため、訓練、節制をする。何のためにもならないことをしないし、できない。でも本当にそれでいいのかしら。「ため」ということばを頭とこころの中から一切追放してしまうと、すばらしく自由になると知りながら、同時に、それがなんて難しいことだろうとつくづく思ってしまう。

（仙台文学館館長）

学芸室日記

○「太宰治に聞く」

昨年から始まった「文学館まつり」。今年は太宰治展会期中ということもあり、津軽三味線と、井上ひさし「太宰治に聞く」の朗読イベントを開催しました。迫力のある朗読と、響き渡る津軽三味線の調べのもと、お客さんはしばし不思議な世界に引き込まれていました。

○内館牧子さん

「太宰治展」に来館

2008年の「草野心平展」の時にもおいでくださいました。込み合う展示室で、熱心に資料や写真をご覧になっていました。お忙しい中、折にふれご来館いただき、嬉しい限りです。

○俳句甲子園　東北地区

仙台大会

宮城県宮城第一高等学校と岩手県立水沢高等学校の決戦。「六月」「万緑」「薔薇」をお題に、両校三句ずつ作品を発表。相手よりも自作が優れていることをアピールしあい、勝敗が決まります。最初はぎこちなさも見受けられましたが、回を重ねるごとに、自作の解説はスムーズになり、相手の作品を褒めてから攻めの質問をするなど、余裕も見られるように。結果は水沢高校の勝利。互いの善戦をたたえあう姿が印象的でした。

○湯のみ茶碗

文学館の棚に残された、一つの湯飲み茶碗。井上ひさし初代館長が使用していたものです。お茶はすぐに飲まず、冷ましてから飲むのが常でした。曰く「ぬるいお茶が好きなんです」。手にとると、湯のみを持つ、ひさし先生の長い指が思い出されます。

仙台文学館ニュース　第十九号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.lit.city.sendai.jp/

［表紙写真］佐々木陸二
［本文挿画］古山　拓
［印刷］（株）ユーメディア

再生紙使用

シリーズ 私の一冊 第十五回

アルチュール・ランボー『地獄の季節』

粟津 則雄

私が、小林秀雄の訳によるアルチュール・ランボーの『地獄の季節』という本に出会ったのは、たしか昭和十八年の春、旧制中学の四年生になったばかりの頃だったと思う。隣りに住んでいた中年の洋画家の書斎で書棚を見まわしているうちにたまたま見付けたというだけのことだったのだが、この出会いは私にとって決定的な出来事となったようだ。それ以前にランボーについての何がしかの予備知識があったわけではない。ボードレールに関しては、芥川の「人生は一行のボオドレエルにも若かない」という警句が心に刻まれていたし、敏や荷風その他の人びとによるいくつかの訳詩も読んでいたが、ランボーについては何ひとつ知らなかった（実は、敏にも荷風にもランボーの詩の訳があるのだが、たぶんそれらは私の眼にとまらなかったのだろう）。そういうわけだから、私がその本を取り出して借りて帰ったのは、佐野繁次郎による色鮮やかな装丁に眼を惹かれたことや、いくつかその文章を読んだことのある小林秀雄という訳者の名前に興味をそそられたことを別にすれば、『地獄の季節』といういかにも中学生好みのタイトルや、何となく「アル中の乱暴者」を連想させるアルチュール・ランボーという名前に好奇心をかき立てられたという他愛のない理由からのことだったのかも知れぬ。だが、画家に借りて家に持ち帰り、無警戒に読み始めたこの本には、思いもかけぬ爆弾が埋め込まれていたようだ。

ランボーは、ごくおさない頃から詩を書き始めるが、わずか数年でフランス近代詩の頂点に達するやたちまち詩を断念して以後は商人としてアフリカで過し、一八九一年三十七歳で世を去った。こういう彼の生涯そのものが私にとってまことに衝撃的だったのだが、彼の本が私に突きつけた問題は、それだけのことでは片付かない。彼の詩が、まさしくこのような生涯を送る人間にしか書けぬものであるということだ。私は、おさない頃から、白秋、朔太郎、光太郎その他、わが国の近代詩人たちに人並以上に親しんでおり、そのことを通して私なりの詩観を作りあげていたのだが、ランボーはそれらの誰ともちがっていた。『地獄の季節』は彼が一八七一年から七三年にかけて行なった詩作上、生活上の危機的な冒険を核としながら、彼にとっての詩と生の根源を照らし出そうとした告白的散文詩集と言っていいものだが、そこには、告白に伴う自己愛はまったくない。何らかの過去のイメージにまつわりつく、懐古的抒情もない。彼にとって過去を語ることは、過去に身を委ねることによって過去をつらぬき超えることであり、過去を捨てることによって奇怪な未来に歩み出ることなのである。

もちろん、最初からこんなことがわかったわけではない。「時よ、来い／あゝ、陶酔の時よ、来い。」とか、「また見付かつた、／何が、永遠が、／海と溶け合ふ太陽が。」とか、「あゝ、季節よ、城よ、／無疵なこゝろが何処にある。」とか、あるいは「もう秋か。――それにしても何故に永遠の太陽を惜むのか、俺達はきよらかな光の発見に心ざす身ではないのか、――季節の上に死滅する人々からは遠く離れて。」といった小林訳の名調子にうっとりしていただけなのだが、来る日も来る日も読み続けているうちに、どうもそういうわけにはゆかなくなった。ランボーの詩と生との危機的な中心とでも言うべきものが、ゆっくりと少しずつ見えて来たのだが、これは単なるランボー理解に留まるものではなかった。私を、私自身の危機的な地点にまで追いつめてゆくことでもあった。

考えてみると、まだ書くことや読むことの意味をはっきりと見定めることも出来ぬ年頃に、書くことや読むことの根拠を奪いかねぬ経験をむりやり押しつけられたようなものだ。何とも危うい道を辿ったものだと思うが、実は、そんなふうにのんびり回顧していることも出来ないのである。ランボーとの出会いは、私にとって若年期の危うい経験として片付けることの出来ないものだ。それは、以後七十年近くものあいだ、私の批評活動の根幹に居すわり続け、私を、私自身のなかの危うい場所に追いつめ続けていると言っていい。

その後私自身は、ランボーの全作品の全訳などという無謀なことを試みた。また、ランボーの長大な評伝を書き始めた。この秋にその第三巻が出ることになっているが、ランボーは、まだパリにさえ出ていないのであって、書き上げるまでにあと何巻書くことになるか、見当もつかぬ。これはそのまま、私にとってのランボーのありようを象徴しているようだ。

粟津則雄（文芸評論家・仏文学者）
1927年、愛知県生まれ。1952年、東京大学仏文学科卒業。1970年『詩の空間』『詩人たち』で藤村記念歴程賞、1982年『正岡子規』で亀井勝一郎賞受賞。主な著作に『ルドン』、『小林秀雄論』、『聖性の絵画』、『精神の対位法』。『日本美術の光と影』、訳書に『ランボオ全詩』など多数。評論の業績によって、1993年紫綬褒章、1999年勲三等瑞宝章を受章。2010年日本芸術院・恩賜賞受賞。法政大学名誉教授。いわき市立草野心平記念文学館館長。

『地獄の季節』アルチュール・ランボー
小林秀雄訳　佐野繁次郎装丁
白水社

『バンスイ、トウソン ヲ、イマ ヨム。』

自作の詩を声で伝える活動「ポエトリーリーディング」を10年以上続けている、仙台在住の詩人・武田こうじさんとともに開催したイベント「詩の文学館」から、一冊の詩集が誕生しました。仙台ゆかりの詩人・土井晩翠と島崎藤村の作品を、武田さんが、自分のことばに置き換え、新たな読み解きを加えた内容。百年以上前の詩人のことばを今につなぐ詩集です。原詩を併記していますので、「ムカシ」と「イマ」の詩人、それぞれの思いに触れてみてください。

企画展「晩翠賞の50年」

仙台の詩人・土井晩翠の名を冠した「晩翠賞」は、1960（昭和35）年の創設以来、多くの優れた詩集に対し贈られ、現代詩の流れの中で、その詩精神を伝えてきました。50回の節目を迎えた晩翠賞の歴史を、受賞詩人とその作品を辿りながら振り返ります。また会期中は、受賞作の朗読や、シンポジウムなどを予定しています。

受賞者に贈られた柳原義達制作の土井晩翠レリーフ

会期：2010年9月18日（土）～10月20日（水）

ライブ文学館 ～言音（ことね）の詩（うた）～

2008年3月から始まった、街で文学を味わう「ライブ文学館」。8回目を数える今回は、詩と和太鼓の競演です。晩翠賞詩人の和合亮一さんが、「風」と「雨」をテーマに詩を作り、和太鼓作曲家の佐藤三昭さんが、その作品をもとに作曲。ステージでは詩の朗読と、和太鼓演奏をお届けするほか、お二人の間に交わされた創作をめぐるやりとりなど、完成に至るまでの過程もお楽しみいただく予定です。ことばと音楽が互いをゆききしながら、交じり合う点を模索する、不思議な感覚を味わってみませんか。

日時：2010年10月13日（水）　午後7時開演

会場：仙台市青年文化センターシアターホール

＊チケットは、仙台文学館、イズミティ21、青年文化センターほか、ローソンチケット、チケットぴあ、イープラスで発売中。

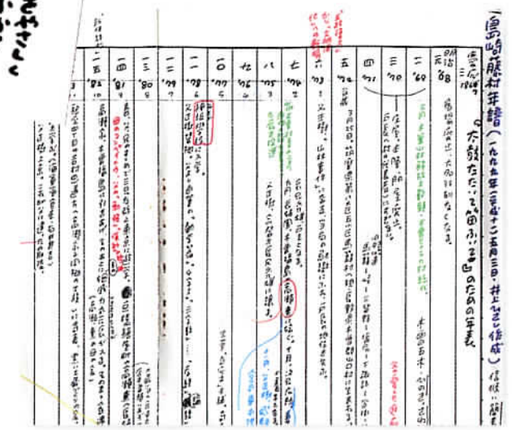
井上ひさし追悼
～仙台文学館での九年間

二〇一〇年4月9日に亡くなった、井上ひさし初代館長（在任一九九八年4月～二〇〇七年3月）。講演会や文章講座、戯曲講座、そして作品を通し、ことばの持つ力や魅力のみならず、ことばで伝えることの大切さを私たちに手渡そうと全力を尽くして下さいました。ひさし先生が一人一人に残した想い出を集めながら、仙台文学館での軌跡を辿ります。

（撮影佐々木 隆二）

仙台文学館の取柄の一つは「生きている」ということです。

（仙台文学館ニュース 第十一号「ひとつの終わりで、もうひとつの始まり」）



これと決めた人物を、徹底的に調べあげ、さまざまな事柄が書き足されていった年譜。どうしてもわからないことを見つけ出し、そこから物語を作るためとのこと。

石川 裕人さん
（TheatreGroup "OCT/PASS" 主宰）

井上さんとは劇のまち戯曲賞の選考で幾度もお会いした。公開の本選考会ではなく、いわゆる予備選考会でのお話が面白すぎた。予備選考会は非公開なので忌憚ない意見が交わされるのだが、井上さんのお話は芝居漫談だった。時にピリっと辛口の演劇論も展開する話術はそのまま井上さんの戯曲の肝でもあった。

前田 有作さん
（Literary Guild Theatre 主宰）

2月21日から8月15日までのロングラン公演LGT「父と暮せば」。いつか観に来てくださるだろうと願いつつ公演を重ねていました。4月11日の朝、井上ひさしさんの訃報を聞き、信じられずしばらく茫然。その日から井上ひさし追悼公演として上演しました。

竹造のせりふは、亡き父親から娘への思いやりのことば。しかし今は、竹造のことばが井上さんから私たち生きている人間へのメッセージに。何度も繰り返したせりふが、その日、また新たなニュアンスで私の体から溢れ出た。

一九九六年、こまつ座の「雨」の座組みに加えてくださった。稽古や本番に井上さんが来られるときは、キャストやスタッフがピリッとする。厳しく見つめ、ねぎらいや励ましを置いて戻って行かれる。イギリスへ演劇留学を希望したときも、文化庁へ推薦書を書いてくださった。当時は褒めすぎでしたが、今はそのことばに伍する役者になれたと思っています。今後も演劇の力を信じ、井上戯曲から芝居を学び、人生を学び、演じ続けます。井上ひさしさん、ありがとうございました。

＊4月29日、仙台文学館でも「父と暮せば」の追悼公演が行なわれました。

井上ひさし追悼 戯曲資料特集展

二〇一〇年6月26日（土）～7月11日（日）

「ロマンス」「ムサシ」など、生前に寄贈された、原稿や構想メモなどをご紹介。創作の舞台裏が垣間見え、作者の息づかいが伝わってくる資料ばかりでした。

展示室内でリーディングを楽しむ「展示室劇場」。昨年の「井上ひさし展」に続き、追悼展でも開催。館林敦士さん、丹野久美子さんにご出演いただきました。

館林 敦士さん
（磯貝メソッド仙台塾代表）

昨年、井上ひさし展で「新釈遠野物語」のリーディング中、首を傾げてニヤニヤしながら客席の隅に座っている井上さんを舞台の上から見つけた。冷や汗が出て科白が飛びそうになった。後で聞いたら、首を曲げて隠れていたのだそうだ。丸見えなのに。

今年、井上ひさし追悼展で「化粧」を演じていた時、あの時と同じ場所に座って首を傾げていた井上さんが見えた、気がした。涙が出そうになって科白が飛んだ。

今度この展示室劇場の舞台に立ったら、嬉しそうにこっちを眺めている井上さんにまた逢えるだろうか。その時は白い歯をこぼそう。

丹野 久美子さん
（劇団1.Q150 主宰）

井上さんの作品は、登場人物ひとりひとりが愛おしい。その誰もが人間臭く、体温が感じられる。だから、痛く、せつなく、そしてあたたかい。生きていることにありがとう、と素直になれる。井上さんと、もっといっぱいお話したかった。

ことばは実は民主主義です。（中略）みんなで決めていく。使えないことばは廃れていくので、ことばの乱れや若者語を気にしてはいけません。そんなことより**大切なのは、私たちひとりひとりが日本語の力をつけていくことです。**

（第四回仙台文学館活用セミナーでの講演）

文章講座

文章の基本を具体的な例を挙げながら、わかりやすく解説。参加者には作文の宿題が出され、最終日は全員が壇上で発表。名前を呼ばれても返事をしない参加者に、厳しく注意する一幕もありました。

多いときには100名の作文一枚一枚に、徹夜で赤を入れることも。参加者の方にとってはまさに宝物です。

宇津志 勇三さん

井上先生の文章教室ほど、濃い時間を過ごしたことはありません。難しいことを誰でも分かるように教えてくださいました。私の机の傍に古びた貼り紙があります。

『ひさし先生の読書と創作』
どんどん情報を入れる→知識にする→知恵をつくりだす→作品にする。

この張り紙を見て、書くことを続けています。

＊宇津志さんはその後「銀の雫文芸賞」を受賞されました。

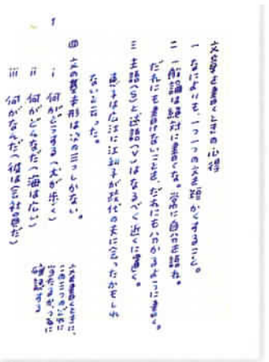
戯曲講座

よい観客を増やしたいとの思いのもと開催。イプセン、チェーホフ、シェークスピアや菊池寛らの作品を取り上げ、戯曲の味わい方を伝授。一つ一つの台詞について言及しながら進めるスタイルで、話がどんどん横道にそれることもしばしば。六時間に及ぶ講座は、いつも途中で時間切れになってしまいました。

佐々木 隆二さん

いプセンやチエホフの戯曲講座は
のはらに吹く風のような
うつくしい、ほんとうの食べものになり
えい養になりました。
ひかりの向こうからも
さんさんと降り注ぎ
しあわせを見守ってくださいますように。

＊佐々木さんは、ひさし先生の写真を三十年以上にわたって撮り続けてこられました。



講座のレジメ

大滝 よう子さん

今も私は、文学館の玄関先でタクシーがエンジンをかけたまま待機している光景を、忘れることができません。分刻みのスケジュールで飛び回っていらした井上先生、お別れするなど絶対にありえないと信じて疑いませんでした。なのに、ひとりで旅立ってしまわれた。先生と同じ時間を共有できましたことは、私にとってかけがえのない宝物です。

＊大滝さんは、学芸室日記で紹介している「文学館まつり」で、井上ひさし作「太宰治に聞く」の朗読を行ないました。

夢ばかり持って、実際に今生きている「今日」については何もしない人たち、こういう人たちに対するものすごい怒り、苛立ち、徹底的批判がこの芝居（「三人姉妹」）なんですね。

（2002年 戯曲講座 チェーホフ「三人姉妹」）

対談や鼎談

特別展にあわせて、島崎藤村や宮沢賢治についての講演を行なったほか、直木賞を受賞した熊谷達也さんや、伊坂幸太郎さんと対談を行ないました。仙台文学館館長としての最後の仕事は、熊谷盛さん、菅原康子さんとの鼎談「演劇の持つ力～気持ちを伝えるということ」でした。

熊谷 達也さん（作家）

私が今の仕事をする上で大きな転機となった小説すばる新人賞・直木賞ともに選考委員をしてくださった井上先生には不思議なご縁を感じています。直接お会いしてお話をさせていただいたのは二度だけでしたが、気さくで優しく、飾ることのない、お会いしているだけで心が和らぐ方でした。井上先生のご冥福を心よりお祈り致します。

2004年9月26日　直木賞受賞記念対談

伊坂 幸太郎さん（作家）

井上ひさしさんとお会いした時、「人間は生きているだけで、つらいことや悲しいことは経験できる。人間が必死に創り出さなくてはいけないのは、笑いだ」といった内容の話をしてくださり、感激しました。それ以来、小説を書く時には常にそのことが頭にあります。直接お会いしたことはほとんどないため、井上さんは依然としてどこかにいらっしゃるようにしか感じられず、だから、いつか胸を張って読んでもらえる作品を書き上げたい、と思いつづけています。

2006年3月4日　小説の力を信じて（誌上対談）

ユーモアをみんな誤解するんですね。「軽い」とかいわれて、批判の対象になる。そうじゃなくて、大切なのは諧謔の精神なんですよ。読んでいる人を「ふふっ」と笑わせたり、ほほえませたりするのも小説の大事な役割です。

（二〇〇六年　伊坂幸太郎氏との対談「小説の力を信じて」）

芝居というのは、人とのつながりとか話し合いから始まるところが大事なんですね。

何か役割から始まるのではなくて、誰かが「こうやりたい」とか、全然違う意見の人が「こうやりたい」というのがうまく結び付いたときに、この二つの思いが二倍どころか一〇〇倍ぐらいになって、そこでいろんな知恵がやりとりされていく。（中略）これが大勢でやる芸術の一番おもしろいところじゃないですかね。

（二〇〇七年　鼎談「演劇の持つ力～気持ちを伝えるということ」）

熊谷 盛さん（劇団 麦主宰）

約五十年も演劇を続けて来れたのは井上作品に出会えたからなのに……。「六〇年安保」の残影の中旗揚げし、ホッと一息もつかの間演劇界に突風のように吹き荒れたアングラ演劇。馴染めなかった。そんな私を救ってくれたのが「日本人のへそ」。危機を迎える度、先生の作品で立ち直れた。今は一演劇人の命の恩人「井上ひさし」先生のご冥福を心から祈るばかりです。

2007年3月4日　控室にて　右が熊谷さん
（撮影 佐々木隆二）

館内では…

三山 タエ子（喫茶・杜の小径店長）

いつも気にかけていただき、「杜の小径」を育てようという、暖かい心遣いを感じました。昨年の先生の特別展の時に、お好きだという「クルミ寒天」をお出ししたら、「おいしい！」と喜んでいただけて嬉しかったです。

好物のねぎそばとクルミ寒天。
文学館で頼むのは、いつもあたたかいそば。
食べ終わると自らお膳を下げに店長の元へ。
ねぎらいのことばを忘れませんでした。

悲しくて淋しい日は、どうか文学館へおいでください。
もちろん悲しくなくてもどうぞ。（仙台文学館ニュース　第6号「文学館の住人たち」）

仙台文学館ゼミナール

2010「本作りワークショップ」進捗状況

二〇〇九年の秋から始まった「本作りワークショップ」。仙台の文学にまつわるあれこれを詰め込んだ一冊の雑誌を完成させることを目標に、月一回のペースで、文学館に集まっています。講師は『仙台学』の編集スタッフ（有限会社荒蝦夷）。企画の考え方や、依頼文書の書き方にはじまり、内容に合わせた文体の選び方、インタビューのコツ、入稿原稿の作成上の注意などなど…百戦錬磨の講師から、様々な手ほどきを受けています。また印刷会社のご好意で、工場内の見学もすることができました。

左より講師の滝沢真喜子さん、土方正志さん、千葉由香さん
「みなさん企画や執筆に苦労しながらも、一冊の雑誌を作り上げるプロセスを楽しんでいるようです。その熱心さには感服します。とにかく個性あふれる企画が盛りだくさんなので、できあがりにご期待ください」

荒蝦夷刊の雑誌・書籍

印刷工場見学。自分たちの原稿が印刷される工程を見学できて感慨深げな様子でした。

台割進行表の説明を受ける参加者。

現在七班に分かれて、練り上げている企画をご紹介すると…

「国民読書年」にちなみ、
□一〇一人インタビュー
　私の一冊
□仙台が舞台になった歴史小説
□仙台のお散歩マップ
　（書店・喫茶店）

完成予定は秋も深まる頃。仙台文学館をはじめ、市内書店で販売予定です。店頭で見かけたら、是非手にとって見てください。

作家の熊谷達也さんにインタビュー。緊張しつつも、熱心に様々な質問をし、予定時間を大幅に超えて終了しました。

これからの企画展示

文学に描かれた伊達政宗（仮称）

2010年10月30日（土）～12月12日（日）

戦国武将ブームの昨今、仙台藩の初代藩主伊達政宗は、「歴女」に人気の武将ですが、多くの作家の創作意欲を掻き立てる人物でもあり、山岡荘八、司馬遼太郎など、多くの作家が小説の主人公として描いています。それらの作品をご紹介しながら、作家をひきつけた政宗の魅力に迫ります。また仙台市博物館の協力を得て、史実に基づく歴史的人物としての政宗もご紹介します。

山岡荘八『伊達政宗』（1997年　毎日新聞社）

大河ドラマ「独眼竜政宗」の原作。「坂骨の人」政宗が「陸奥の政宗」から「日本の政宗」を目指し、戦国の世をしたたかに生き抜く様が描かれる。

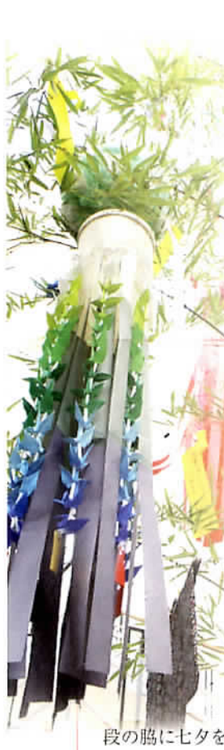
司馬遼太郎『馬上少年過ぐ』（1999年　新潮社）

政宗を「三国志」の曹操になぞらえ、政宗が詠んだ詩や歌に注目。その読み解きをしながら、政宗の生涯を、誕生から謀略により父・輝宗を失うまでに焦点をあてて描く。

コラム

文学館の住人たち

－その5－

竹

仙台の七夕は、月遅れの8月6日から8日までの3日間。仙台文学館では、毎年7月下旬から開催している「こども文学館えほんのひろば」に合わせ、展示室へと続く階段の脇に七夕を飾ります。文学館の裏山には竹林があり、春は筍が生え、夏は七夕の竹として大活躍。図書館などの施設からも引き合いがあり、文学館の竹は、市内各所の七夕をかげで支えています。